

LINE 公式アカウント始動!

友達募集中

LINE @240jojrr

上記IDにて検索もしくは
右記QRより友達追加!

Instagram

大阪南医療センターの日常をご紹介します!
ぜひフォローしてください♪

osakaminami_iryō

診療科 **NOW** がんゲノム医療推進室



TOPICS

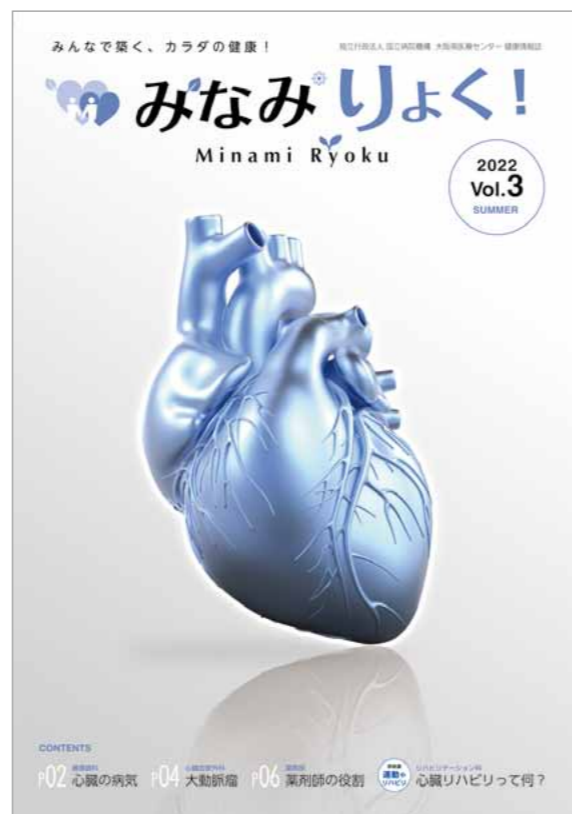
「みなみりよく!」第3号発刊のお知らせ

健康に関する様々な情報をお届けする「みなみりよく!」の第3号を
発刊しました。「みなみりよく!」は、地域医療機関向けの本誌「南窓」とは
異なり、主に患者さん向けの内容となっている健康情報誌です。

3号は『心臓』特集として、心臓の病気を取り上げ、当院の循環器科や
心臓血管外科で行う治療法、心臓リハビリについて、写真を用いて
詳しく解説しています。

また、薬剤部にもフォーカスを当て、薬剤師の役割を紹介しました。
病棟、集中治療室、患者支援センターと、働く場所によって薬剤師の仕事
は大きく異なります。こちらもぜひ注目してご覧ください。

「みなみりよく!」は地域医療機関の皆様にも送付させていただきます。
待合室などの、患者さんが気軽に読めるような場所へ配架いただけます
と幸いです。



広報誌「南窓」のご意見・ご感想をお聞かせください

広報誌「南窓」をお読みいただき、誠にありがとうございます。

お客様一人ひとりの声をより良い広報誌作りに活かしてゆきたいと考え、ご意見・ご感想を募集しております。

皆様からのご意見は、今後の改善を進める上で参考にさせていただきます。上記のURL または QRコードよりフォームにアクセスが可能です。

※ご意見・ご感想への返信はいたしておりません。ご了承ください。ご意見全てにはお答え出来ない場合がございます。予めご了承ください。

ご意見・ご感想はこちら ▶ <https://contact.osakaminamihosp.jp/>



大阪南医療センター 循環器疾患センター 胸背部痛、呼吸困難、動悸等 循環器疾患が疑われる際には緊急対応連絡先へご連絡ください。
24時間緊急対応 (ハートコール) 直通 Tel. 0721-53-3200



南河内医療圏唯一のがんゲノム医療連携病院

患者さんの**がん遺伝子**を解析し、**新しい治療の可能性**を探る

腫瘍内科医長/がんゲノム医療推進室長 **工藤 慶太**

「がんゲノム医療推進室の動画はこちら」



324のがん関連遺伝子を解析

「がんゲノム医療推進室」は、2020年4月、私を含む医師
3名、薬剤師、臨床検査技師、看護師、遺伝カウンセラー、
診療情報管理士、医療社会事業専門員をメンバーとして
開設。同年9月より「がん遺伝子パネル検査」を開始しました。
今では年間およそ50件の検査を実施し、そのうち4分の1
ほどは他施設からの患者さんです。

保険診療におけるがん遺伝子パネル検査の対象は、固形がん
で、全身状態が保たれていながら標準治療のない患者さん、

進行もしくは転移があり標準治療の終了した患者さんです。
当院では次世代シーケンサーを用いて「FoundationOne®
CDx がんゲノムプロファイル」「FoundationOne® Ligated
CDx がんゲノムプロファイル」を採用しています。前者は
以前の手術で採取したがん組織を用い、後者はがん組織の
ない場合に血液を採取して行うもので、324の遺伝子を
解析できます。



適切な**タイミング**も重要

がん遺伝子パネル検査では、結果が出ると必ず「エキスパートパネル」という会議を開きます。これはがんゲノム医療拠点病院である近大病院と当院の医師、主治医をはじめ遺伝医学に関する専門医師や遺伝子カウンセリング技術者を有するスタッフなど多職種の専門家による検討会で、検査結果を解釈し、治療に関係する遺伝子変異があるかどうか、あった場合どのような治療を行うのが適切か、また二次的

所見が認められるかどうか、ご本人にどのように伝えるのがよいか等々を検討し、その結果を患者さんに伝えます。遺伝子異常に効果の期待できる薬がある場合は、標準治療、治験・臨床試験・自由治療という選択肢があげられます。但し、結果をお伝えするまでに6週間から8週間かかりますので、患者さんの体力や状況の変化を鑑みて、早めの適切なタイミングで検査を受けることが重要です。

二次的所見が認められた場合

がん遺伝子パネル検査によって治療の適応となる遺伝子変異が検出されるのは10~20%、実際に治療に結びつけられるのは8%前後。そのなかには、2か月の間に、せっかく治療可能な遺伝子変異が見つかったのに体調面で治験を受けるのが難しくなったというケースもあり、確率は決して高くはありません。けれど、新しい治療の可能性はゼロではないのです。また、米女優のアンジェリーナ・ジョリーさんで話題になった二次的所見、いわゆる「家族性の遺伝子異常」が見つかることもあります。ただ、がん遺伝子パネル検査では遺伝性腫瘍とは確定できず、確定させるための検査に進むかどうか

を遺伝カウンセラーによるカウンセリングを受けていただいで、決めることになります。確定されることによるメリットは大きく、新たに治療が可能になることもありますし、何よりあとの世代の早期発見につながります。一方で、遺伝情報によってたとえば採用や昇進に影響するとか、医療保険の加入制限といった不利益を生じることが、皆無とはいえず、家族性を指摘されたご本人の精神的ストレスというデメリットもあるでしょう。しかしながら私個人としては、確定によるプラス面のほうが圧倒的に大きいと考えています。

がん遺伝子パネル検査の将来へ向けて

2024年に近大病院が移転しますと、この検査が行えるのは南河内エリアでは当院だけになりますので、ますます大切な役割を担うこととなります。がん遺伝子パネル検査はまだ課題も多いですが、検査機器がさらに進化すれば今まで見つけられなかった遺伝子変異が見つかるようになり、また今は標準治療終了というラスタラインが「保険適用」の条件となっていますが、これを診断時までで前倒しできれば

治療の選択の幅も広がるのではないかと思います。医療従事者としてはそうした点に大きな期待をしつつ、地域社会においては、患者さんばかりではなく二次的所見を告知された方々にとって住みよい社会となることを心から望んでいます。そしてこれからも肅々と、がん遺伝子パネル検査の発展の一翼となれるよう努めたいと考えています。



左から 安達 名緒子・大屋 健・末武 貢・野上 毅

日々研鑽を重ね**病院の心臓部**としての役割を果たす



「臨床検査科の動画はこちら」

臨床検査科長 おおや たけし 大屋 健	臨床検査技師長／輸血管理室長 すえたけ みつぐ 末武 貢	副臨床検査技師長 のがみ たけし 野上 毅	副臨床検査技師長 あだち なおこ 安達 名緒子
----------------------------------	---	------------------------------------	--------------------------------------

迅速で正確な検査、そして見逃さず「**拾い上げる力**」で治療を支える

末武 私たちの役割は迅速に正確な検査結果を報告することです。そのために日々の精度管理を徹底し、幅広い技術や応用力を高めるために検査科全体で月に1度勉強会を開催し、コロナ禍であってもウェブを利用した研修会など自己研鑽を積んでいます。さらに定期的に個人の力量評価を実施するなど、治療の確かな指針となる検査結果を導き出せるようにさまざまな取り組みをしています。当科には経験豊かな臨床検査技師が多く、若手の技術向上にもつながっていますし、「測定結果(数値)からは見えてこない情報を拾い上げる力」も強みだと考えています。検体検査で予想外の数値が出た場合などは、「この患者さんになぜこういう数値が出たのか」を他の検査結果とも照らし合わせて検討し、所見にも反映できるというのは、「常に考える力」を育てていることの表れであろうと思います。またCOVID-19の検査のように非常時における検査の拠点としての心構えも持ち続けていきたいと考えています。

野上 私は検体検査を担当しています。他施設でも通用する、つまり治療に正しく利用できる検査結果を責任を持って出すことが重要と考えています。その為に日々の測定項目の精度管理を徹底しています。当検査室では、関節リウマチの診断、治療効果の指標となるMMP-3検査など、検査頻度が高くない検査についても診療貢献の意義をもって行っています。患者さんの検査結果を精度保証することが有用な治療に貢献

できると考えています。直接患者さんと接することはなくても、チーム医療の一員であるとの意識を強くもって、日々の検査に努めています。

安達 生理検査では学会のガイドラインに沿った検査方法や手順で検査を実施しています。所見の記載においても、ガイドラインを参考にすることにより、正確な検査結果を報告し、診断に役立つ情報を提示できるよう心掛けています。また、疾患に特徴的な心電図波形や超音波検査で珍しい症例があれば情報共有し、ディスカッションするなど技術・知識の向上を常に目指しています。今後は新しい超音波診断装置を使用し、脂肪肝の程度や肝臓の繊維化を計測することにより、生活習慣病などの診断や経過観察等に役立てていければと思っています。

大屋 検査は、「依頼を出す側にも責任」があります。依頼内容が過度であったり、医学的に必要性が低かったり、過剰に負担をかけるものと思われる場合には私は医師と臨床検査科との間に入り折衝を行います。臨床検査科はすべての検査を「365日・24時間」引き受けています。大変負荷のある現場ですが、信頼のあるデータを継続的に出せなければ病院はその機能を1日たりとも果たせません。その意味では病院の心臓です。依頼を出す側の医師として、技師一人一人の技術者としての矜持に支えられている現場だと実感します。